



Red Hat Insights 2020-04

Red Hat Insights のクライアント設定ガイド

Insights クライアントの設定オプションおよびユースケース

Red Hat Insights 2020-04 Red Hat Insights のクライアント設定ガイド

Insights クライアントの設定オプションおよびユースケース

法律上の通知

Copyright © 2020 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

本ガイドは、Insights クライアントの機能を設定する Red Hat Insights ユーザーを対象にしています。お使いのシステムの Insights クライアント設定は、Red Hat Insights との対話に影響します。フィードバックを提供: 本書の改善に関するご意見がある場合や、エラーを発見された場合は、Bugzilla レポートを <http://bugzilla.redhat.com> まで送信してください。Cloud Software Services (cloud.redhat.com) 製品を選択し、Documentation コンポーネントを使用します。

目次

第1章 RED HAT INSIGHTS クライアント設定の概要	3
1.1. クライアント設定の概要	3
1.2. INSIGHTS クライアント CLI および設定ファイルの対話	4
1.3. INSIGHTS クライアントディストリビューション	4
第2章 RED HAT INSIGHTS クライアントの設定	5
2.1. RED HAT INSIGHTS へのシステムの登録	5
2.2. ホスト表示名の変更	6
2.3. クライアントバージョンの表示	6
第3章 RED HAT INSIGHTS クライアントデータの難読化	7
3.1. IPV4 アドレスの難読化	7
3.2. ホスト名の難読化	7
3.3. RED HAT INSIGHTS クライアントの難読化の設定	8
3.4. IPV4 アドレスの難読化	8
3.5. ホスト名の難読化	9
第4章 RED HAT INSIGHTS クライアントデータリダクション	10
4.1. RED HAT INSIGHTS クライアントリダクションの設定	10
4.2. リダクションおよび REMOVE.CONF ファイルの使用	10
4.3. REMOVE.CONF を使用した RED HAT INSIGHTS クライアントリダクションの設定	11
4.4. リダクションおよび YAML ファイルの使用	14
4.5. YAML ファイルを使用した RED HAT INSIGHTS クライアントのリダクションの設定	15
4.6. INSIGHTS クライアントアーカイブの検証	17
第5章 RED HAT INSIGHTS のタグ付けの概要	20
5.1. タグおよび TAGS.YAML の作成	20
5.2. システムにタグを追加	21
5.3. タグを追加または変更するための TAGS.YAML の編集	22
第6章 INSIGHTS-CLIENT スケジュールの変更	24
6.1. クライアントスケジュールの無効化	24
6.2. INSIGHTS クライアントスケジュールの有効化	26
6.3. クライアントスケジュールの変更	27
第7章 RED HAT INSIGHTS の自動ルール更新の変更	29
7.1. RED HAT INSIGHTS の自動ルール更新の無効化	29
7.2. RED HAT INSIGHTS の自動ルール更新の有効化	29
第8章 認証方法の設定	31
第9章 サポート用の診断ログの作成	32
第10章 INSIGHTS-CLIENT のコマンドオプション	33
第11章 INSIGHTS クライアントの REMOVE.CONF 設定ファイルのオプション	36
第12章 INSIGHTS クライアントの YAML リダクション設定ファイルのオプション	38
第13章 INSIGHTS クライアント設定ファイルのオプション	40

第1章 RED HAT INSIGHTS クライアント設定の概要

本ガイドでは、システムに Red Hat Insights クライアントを設定する方法を説明します。**insights-client** コマンドと、関連する設定ファイルを使用して、システムが Red Hat Insights と対話する方法を制御できます。

- Insights クライアント機能の一般情報および概要については、最初の章で説明します。
- Insights クライアントコマンドと設定ファイルを使用して特定のタスクを実現する方法に関する情報は、概要情報を参照してください。
- コマンドリファレンスと設定ファイル参照情報は、本書の最後にあります。

ナビゲーションリンクは、検索内容を迅速に特定するのに役立ちます。

1.1. クライアント設定の概要

Red Hat Insights クライアントは、システムについての情報を収集し、クラウドアプリケーションである Red Hat Insights に送信します。CLI および設定ファイルオプションのコマンドオプションは、収集して Red Hat Insights と共有される情報を変更します。これらのオプションは以下を制御します。

- データ難読化
 - IP アドレスの難読化
- データリダクション
 - 特定のファイル
 - 特定のコマンドの出力
 - パターン一致の削除
 - キーワード置き換え
- Insights クライアントスケジューリング
- Insights ルールの更新
- Insights クライアント認証方法
 - 証明書ベース
 - SSO ベースまたは基本
- システムのタグ付け



注記

IP アドレスの難読化は、IPv4 アドレスにのみサポートされています。

Red Hat Insights クライアントによって収集される情報は **tar** ファイルに保存されるため、そのファイルは **アーカイブファイル** と呼ばれます。

1.2. INSIGHTS クライアント CLI および設定ファイルの対話

Red Hat Insights クライアントはスケジューラーに従って実行されます。デフォルトでは 24 時間ごとに実行されます。クライアントは **insights-client** コマンドを入力するときも実行されます。

クライアントが実行されると、以下のように動作が順番に制御されます。

1. **insights-client** コマンド入力時に提供された値 (ある場合)。CLI で入力した値は、その Insights クライアントの実行についての設定ファイル設定とシステム環境の設定を上書きします。
2. 設定ファイル (`/etc/insights-client/insights-client.conf` および `/etc/insights-client/remove.conf`) の設定は、システム環境設定をオーバーライドします。
3. CLI またはクライアント設定ファイルの影響を受けないシステム環境変数 (**printenv**) の値が使用されます。

insights-client コマンドで指定するオプションは、その実行にのみ使用されます。これらの値は、設定ファイルまたは環境変数に設定した値を一時的に上書きできます。



注記

insights-client コマンドを使用して表示名を即座に設定できますが Insights クライアントは実行されません。



注記

RHEL 6.9 以前を使用している場合、クライアントコマンドは **redhat-access-insights** になります。

1.3. INSIGHTS クライアントディストリビューション

Insights クライアントは、以下の表に示されるように Red Hat Enterprise Linux (RHEL) で利用できます。

RHEL リリース	コメント
RHEL 8	Insights クライアントとともに配布され、事前にインストールされます。
RHEL 7	Insights クライアント RPM パッケージが読み込まれた状態で配布されますが、インストールされません。
RHEL 6.10 以降	Insights クライアント RPM パッケージをダウンロードし、インストールする必要があります。

関連情報

- [Getting Started with Red Hat Insights](#)

第2章 RED HAT INSIGHTS クライアントの設定

本セクションの手順では、システムに Red Hat Insights クライアントを設定する方法を説明します。

前提条件

- Root パーミッションまたはそれに相当するパーミッションがある。設定ファイルの変更または設定ファイルの追加には、root パーミッションが必要です。
- Red Hat Insights クライアントがシステムにデプロイされている。

2.1. RED HAT INSIGHTS へのシステムの登録

サービスを使用する前に、Red Hat Insights にシステムを登録する必要があります。オプションで、システムを登録する際に、ホストに表示名を割り当てることができます。



注記

システムの登録時に表示名を割り当てない場合、Red Hat Insights は `/etc/hostname` の値を使用します。

前提条件

- Red Hat Insights クライアントがシステムにデプロイされている。
[Red Hat Cloud Access が管理する既存の RHEL システムに Red Hat Insights をデプロイする](#)
[Red Hat Update Infrastructure が管理する既存の RHEL システムに Red Hat Insights をデプロイする](#)
- クラウドベースの Red Hat Insights サービスにアクセスできます。
[Red Hat Insights 向けの 基本認証の設定](#)

手順

1. `--register` オプションを指定して `insights-client` コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --register
```

2. `insights-client` コマンドを `--register` オプションと `--display-name` オプションを指定して入力し、GUI に表示する名前を指定するオプションを指定します。

```
[root@insights]# insights-client --register --display-name ITC-4  
System display name changed from None to ITC-4
```

検証手順

- `--status` オプションを指定して `insights-client` コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --status  
System is registered locally via .registered file. Registered at 2019-08-20T12:56:48.356814  
Insights API confirms registration.
```

2.2. ホスト表示名の変更

GUI に表示されるホスト表示名を変更できます。Red Hat Insights でシステムを登録するか、登録後にこの変更を行います。システムの登録時に表示名を割り当てない場合、Red Hat Insights は `/etc/hostname` の値を使用します。



注記

ホスト名を難読すると、`/etc/hostname` で設定される `hostname` が難読化します。`hostname` が難読化されてもホストを識別できるように **表示名** を割り当てます。

前提条件

この手順はオプションです。デフォルト `hostname` に加えて表示名を使用するかどうかを決定します。

手順

1. `insights-client` オプションを指定して `--display-name` コマンドを入力し、表示名を指定します。

```
[root@insights]# insights-client --display-name ITC-4
System display name changed from None to ITC-4
```

2. スペースを含む表示名を作成するには、二重引用符を使用します。

```
[root@insights]# insights-client --display-name "ITC-4 B9 4th floor"
System display name changed from None to ITC-4 B9 4th floor
```

関連情報

- [「ホスト名の難読化」](#)
- [「Red Hat Insights へのシステムの登録」](#)

2.3. クライアントバージョンの表示

クライアントバージョンとクライアントコアバージョンを表示できます。

手順

- `--version` オプションを指定して `insights-client` コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 3.0.6-0
Core: 3.0.121-1
```

関連情報

以下のリンクは、クライアントの変更ログ情報を提供します。

- [Red Hat Insights Client Core Changelog](#)
- [Changelog ファイル](#)

第3章 RED HAT INSIGHTS クライアントデータの難読化

Red Hat Insights クライアントは、IP アドレスの難読化とホスト名の難読化を提供します。難読化は `/etc/insights-client/insights-client.conf` 設定ファイルの設定によって制御されます。

設定ファイルで、難読化を有効にするかどうかを選択します。IP アドレスの難読化を選択して、ホスト名の難読化を追加できます。ホスト名の難読化のみを選択することはできません。

難読化は Python SoS プロセスを使用して機能し、ホスト名および IP アドレスを Insights クライアントアーカイブの処理時に事前設定された値に置き換えます。処理されたアーカイブファイルが Red Hat Insights に送信されます。

難読化の置換値を選択することはできません。

3.1. IPV4 アドレスの難読化

IP アドレスの難読化を選択すると、アーカイブファイルのホストアドレスは Python SoS ファイルで指定される値に変更されます。難読化に提供された値は設定できません。IPv4 ホストの IP アドレスのどの部分を難読にするかを選択することはできません。

以下の例で、難読化時にどのように表示されるかを比較して、元のホスト IP アドレスを示す以下の例を考慮してください。

- 元のホスト IP アドレス

```
192.168.0.24
```

- Red Hat Insights に表示される、難読化されたホスト IP アドレス

```
10.230.230.1
```

別のシステムで IP アドレスの難読化を選択すると、アーカイブファイルの IP アドレスが同じ難読化されたら値 (**10.230.230.1**) に変更されます。Red Hat Insights GUI では、難読化の結果と同じ IP アドレスを持つ複数のシステムが表示される場合があります。



注記

IP アドレスの難読化は、IPv4 アドレスにのみサポートされています。

3.2. ホスト名の難読化

ホスト名の難読化を選択すると、アーカイブファイルの `/etc/hostname` の値は Python SoS ファイルで指定される値に変更されます。難読化されたホスト名が Red Hat Insights に表示されます。以下の例を見てみましょう。

- 元の `/etc/hostname`

```
RTP.data.center.01
```

- Red Hat Insights に表示される難読化された `/etc/hostname`

```
host0
```

ホスト名が難読化を使用するには、IP アドレスの難読化を有効にする必要もあります。



注記

別のシステムでホスト名が難読化するように設定すると、その名前は同じ難読値を使用します。Red Hat Insights GUI では、難読化の結果と同じ **hostname** で複数のシステムが表示される場合があります。



注記

難読化されず、Red Hat Insights に表示されるシステムの表示名を割り当てるできません。**/etc/hostname** のみが難読化されています。

関連情報

- [「IPv4 アドレスの難読化」](#)
- [「ホスト名の難読化」](#)
- [「ホスト表示名の変更」](#)
- [Python SoS Workflow System](#)

3.3. RED HAT INSIGHTS クライアントの難読化の設定

以下の手順では、Red Hat Insights クライアントで難読化オプションを設定する方法を説明します。

- [「IPv4 アドレスの難読化」](#)
- [「ホスト名の難読化」](#)

3.4. IPV4 アドレスの難読化

Red Hat Insights に送信される前に、アーカイブファイルの IPv4 ホストアドレスを難読化できます。



注記

ホスト名を難読化したい場合は、IP アドレスを難読化する必要があります。

手順

1. エディターで **/etc/insights-client/insights-client.conf** ファイルを開きます。
2. 対象の行を見つけます。

```
#obfuscate=False
```

3. **#** を削除して、**False** を **True** に変更します。

```
obfuscate=True
```

4. **/etc/insights-client/insights-client.conf** ファイルを保存してから閉じます。

3.5. ホスト名の難読化

Red Hat Insights に送信される前に、アーカイブファイルでホスト名を難読化できます。システムに単一のホスト名が割り当てられている場合は、`/etc/hostname` の `hostname` が `host0` に変更されます。追加のホスト名はシステムに設定したホスト名の数まで、`host1`、`host2` に切り替わります。

前提条件

- 「IPv4 アドレスの難読化」

手順

1. エディターで `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを開きます。
2. `obfuscate_hostname` を含む行を見つけます。

```
#obfuscate_hostname=False
```

3. `#` を削除して、`False` を `True` に変更します。

```
obfuscate_hostname=True
```

4. `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを保存してから閉じます。
5. (オプション) `--display-name` オプションを指定して `insights-client` コマンドを使用し、システムの表示名を割り当てます。表示名は難読化されません。

```
[root@insights]# insights-client --display-name ITC-4
```

第4章 RED HAT INSIGHTS クライアントデータリダクション

Red Hat Insights クライアントは、データリダクションオプションを提供します。RHEL のバージョンによっては、データリダクションを制御する方法が2つあります。

表4.1 データリダクションアクションおよび RHEL バージョン

RHEL のバージョン	リダクション方法
RHEL 6.9、7.8、8.2、およびそれ以前	設定ファイル remove.conf
RHEL 6.10、7.9、8.3 以降	YAM ファイル file-redaction.yaml file-content-redaction.yaml

remove.conf 設定ファイルまたは YAML ファイルを作成する必要があります。デフォルトではインストールされていません。

関連情報

- [「Red Hat Insights クライアントリダクションの設定」](#)

4.1. RED HAT INSIGHTS クライアントリダクションの設定

Red Hat Insights クライアントは、データリダクションオプションを提供します。RHEL のバージョンによっては、データリダクションを制御する方法が2つあります。

- RHEL 6.9、7.8、8.2、およびそれ以前
[「remove.conf を使用した Red Hat Insights クライアントリダクションの設定」](#)
- RHEL 6.10、7.9、8.3 以降
[「YAML ファイルを使用した Red Hat Insights クライアントのリダクションの設定」](#)

4.2. リダクションおよび REMOVE.CONF ファイルの使用

設定ファイルを使用する場合、redaction は **/etc/insights-client/remove.conf** の内容によって制御されます。オプションとして、別の redaction 設定ファイルを使用するように Insights クライアントを設定できます。

リダクション設定ファイルのエントリーに基づいて、以下のいずれかを指定できます。

- データの収集から特定のファイルとそのコンテンツを削除する
- データ収集から選択したコマンド出力を削除
- パターンと一致する情報の削除
- 特定の文字列をデフォルトの **keyword** 文字列に置き換え

消去でリダクションを設定する場合、リダクションされた情報はアーカイブファイルに記録されることはありません。リダクションは、アーカイブファイルでデータをキャプチャーする前に、データを事前処理して実行します。

文字列置換によるリダクションの場合、アーカイブファイルは、Red Hat Insights に送信される前に Python SoS プロセスが処理します。

備考

正規表現の一致は **remove.conf** ファイルではサポートされていません。

コマンドラインオプションを使用して、アーカイブファイルの出力を制御できます。たとえば、アーカイブファイルを生成できますが、Red Hat Insights に送信できません。アーカイブが送信される前に、再アクションの結果を検査して検証できます。

備考

ファイルおよびコマンドの出力を訂正すると、それらの情報は Insights ルールと比較できません。これらの省略により、Insights はシステムに適用される問題を特定できない可能性があります。

関連情報

- [「Red Hat Insights クライアントリダクションの設定」](#)

4.3. REMOVE.CONF を使用した RED HAT INSIGHTS クライアントリダクションの設定

/etc/insights-client/remove.conf ファイルはリダクションを制御します。Insights クライアントリダクションを使用する前に、このファイルを作成する必要があります。

手順

1. エディターを使用して、**/etc/insights-client/remove.conf** ファイルテンプレートを作成します。

```
[remove]
files=/etc/cluster/cluster.conf,/etc/hosts
commands=/bin/dmesg,/bin/hostname
patterns=password,username
keywords=super$ecret,ultra$ecret+
```

2. オプションで、redaction のアーカイブに適用しない行を削除します。
3. **remove.conf** ファイルのパーミッションが **root** 所有者のみに設定されていることを確認します。

```
[root@insights]# ll remove.conf
-rw-----. 1 root root 145 Sep 25 17:39 remove.conf
```

4. 利用可能な各リダクションオプションを適用する方法については、その他のリソースを参照してください。

関連情報

- [「特定のファイルの内容の重複排除」](#)

- 「特定のコマンドの取り消し」
- 「文字列パターンの編集」
- 「キーワードの重複」
- 「**remove.conf** ファイルの検証」

4.3.1. 特定のファイルの内容の重複排除

remove.conf ファイルを使用して、赤のある特定のファイルを選択できます。選択したファイルとその内容はアーカイブファイルに含まれません。

前提条件

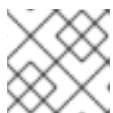
- **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルを作成する必要があります。
[「Red Hat Insights クライアントリダクションの設定」](#)

手順

1. エディターを使用して **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルを開きます。

```
[remove]
files=/etc/cluster/cluster.conf,/etc/hosts
commands=/bin/dmesg,/bin/hostname
patterns=password,username
keywords=super$ecret,ultra$ecret+
```

2. **files=** の行で、サブスクリブするファイルをアーカイブファイルから追加または削除します。



注記

各ファイル名はコンマで区切られています。スペースは使用しないでください。

3. Insights クライアントアーカイブからファイルを行わないようにするには、**files=** の行を削除します。
4. ファイルを保存してから閉じます。

4.3.2. 特定のコマンドの取り消し

remove.conf ファイルを使用して編集した特定のコマンドを選択できます。これらのコマンドの出力はアーカイブファイルに含まれません。

前提条件

- **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルを作成する必要があります。
[「Red Hat Insights クライアントリダクションの設定」](#)

手順

1. エディターを使用して **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルを開きます。


```
[remove]
files=/etc/cluster/cluster.conf,/etc/hosts
commands=/bin/dmesg,/bin/hostname
patterns=password,username
keywords=super$ecret,ultra$ecret+
```

2. **commands=** の行で、サブスクリブするコマンドをアーカイブファイルから追加または削除します。



注記

各コマンド名はコンマで区切られています。スペースは使用しないでください。

3. Insights クライアントアーカイブからコマンドを行わないようにするには、**command=** の行を削除します。
4. ファイルを保存してから閉じます。

4.3.3. 文字列パターンの編集

remove.conf ファイルを使用して編集した特定の文字列パターンを選択できます。指定する文字列パターンは、行全体を削除することでアーカイブファイルから編集されます。たとえば、文字列パターンが **name** の場合、そのパターンは **hostname**、**filename**、**username** に一致し、これらを編集します。



注記

正規表現およびワイルドカード一致 (**egrep**) はサポートされません。

前提条件

- **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルを作成する必要があります。
「[Red Hat Insights クライアントリダクションの設定](#)」

手順

1. エディターを使用して **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルを開きます。

```
[remove]
files=/etc/cluster/cluster.conf,/etc/hosts
commands=/bin/dmesg,/bin/hostname
patterns=password,username
keywords=super$ecret,ultra$ecret+
```

2. **patterns=** の行で、アーカイブファイルからやり直す文字列パターンを追加します。



注記

各パターンは、コンマで区切ります。スペースは使用しないでください。

3. Insights クライアントアーカイブからパターンをなくすには、**patterns=** の行を削除します。
4. ファイルを保存してから閉じます。

4.3.4. キーワードの重複

remove.conf ファイルを使用することで編集した特定のキーワードを選択できます。指定したキーワードは、アーカイブファイルで **keyword0**、**keyword1**、**keyword2** に置き換えられます。

前提条件

- **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルを作成する必要があります。
[「Red Hat Insights クライアントリダクションの設定」](#)

手順

1. エディターを使用して **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルを開きます。

```
[remove]
files=/etc/cluster/cluster.conf,/etc/hosts
commands=/bin/dmesg,/bin/hostname
patterns=password,username
keywords=super$ecret,ultra$ecret+
```

2. **keywords=** の行で、アーカイブファイルから希望のキーワードを追加します。



注記

各キーワードはコンマで区切ります。スペースは使用しないでください。

3. Insights クライアントアーカイブからのキーワードをなくすには、**keyword=** の行を削除します。
4. ファイルを保存してから閉じます。

4.3.5. remove.conf ファイルの検証

remove.conf ファイルを検証して、リダクションに使用する前に構文が正しいことを確認できます。

前提条件

- **/etc/insights-client/remove.conf** ファイルを作成する必要があります。
[「Red Hat Insights クライアントリダクションの設定」](#)

手順

1. **insights-client** オプションを指定して **--validate** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --validate
```

2. コマンドに表示されるエラーをすべて修正します。

4.4. リダクションおよび YAML ファイルの使用

リダクションに YAML ファイルを使用する場合は、2つのファイルがリダクション操作を制御します。編集するコンテンツに応じて、1つまたは両方のファイルを使用できます。指定された内容は、アーカイブファイルでキャプチャーされる前に再取得されます。

表4.2 リダクションおよび YAML ファイル

YAML ファイル	説明
<code>/etc/insights-client/file-redaction.yaml</code>	このファイルには、再適用するコマンドおよびファイルの一覧が表示されます。一覧表示されているコマンドまたはファイルの出力が読み込まれます。
<code>/etc/insights-client/file-content-redaction.yaml</code>	このファイルでは、パターンのリダクションおよびキーワード置換を定義します。パターンのリダクションは、パターン一致または正規表現の一致で行われます。キーワード置換は、キーワードを汎用識別子に置き換える Python SoS プロセスによって行われます。

関連情報

- [「YAML ファイルを使用した Red Hat Insights クライアントのリダクションの設定」](#)

4.5. YAML ファイルを使用した RED HAT INSIGHTS クライアントのリダクションの設定

2つの YAML ファイルは Insights クライアントリダクションを制御します。RHEL 6.10、7.9、8.3 以降でリダクションを使用する前に、各 YAML ファイルを作成する必要があります。

- [「YAML コマンドおよびファイルリダクションの設定」](#)
- [「YAML パターンおよびキーワードリダクションの設定」](#)

4.5.1. YAML コマンドおよびファイルリダクションの設定

`/etc/insights-client/file-redaction.yaml` ファイルは YAML ファイルです。再適用するコマンドおよびシステムファイルを一覧表示します。一覧表示されたコマンドまたはファイルの出力は、アップロードしたアーカイブファイルには含まれません。

キーワード置換またはパターン一致に基づいて再調整する場合は、[「YAML パターンおよびキーワードリダクションの設定」](#)を参照してください。

前提条件

- YAML 構文の基本を理解している必要があります。YAML の説明は、この手順の範囲外です。
- `/etc/insights-client/` にファイルを作成するには、**root** パーミッションまたは同等のパーミッションが必要です。

手順

1. エディターを使用して、`/etc/insights-client/file-redaction.yaml` ファイルを作成します。

例

```
# file-redaction.yaml
---
```

```
# Exclude the entire output of commands
# Specify the full command path or the symbolic name in .cache.json

commands:
- /bin/rpm -qa
- /bin/ls
- ethtool_i

# Exclude the entire output of files
# Specify the full filename path or the symbolic name in .cache.json

files:
- /etc/audit/auditd.conf
- cluster_conf
```

2. **file-redaction.yaml** ファイルのパーミッションが **root** 所有者のみに設定されていることを確認します。

```
[root@insights]# ll file-redaction.yaml
-rw-----. 1 root root 145 Sep 25 17:39 file-redaction.yaml
```

関連情報

[「Insights クライアントアーカイブの検証」](#)

4.5.2. YAML パターンおよびキーワードリダクションの設定

この `/etc/insights-client/file-content-redaction.yaml` ファイルは、パターンリダクションおよびキーワード置換に基づいてリダクションを定義する YAML ファイルです。パターンのリダクションは、パターン一致または正規表現の一致で行われます。キーワード置換は、キーワードを汎用識別子に置き換える Python SoS プロセスによって行われます。

コマンド出力または特定のファイルに基づいて再調整する場合は、[「YAML コマンドおよびファイルリダクションの設定」](#) を参照してください。

前提条件

- YAML 構文の基本を理解している必要があります。YAML の説明は、この手順の範囲外です。
- `/etc/insights-client/` にファイルを作成するには、**root** パーミッションまたは同等のパーミッションが必要です。

手順

1. エディターを使用して、`/etc/insights-client/file-content-redaction.yaml` ファイルを作成します。

例

```
# file-content-redaction.yaml
---
# Pattern redaction per matching line
# Lines that match a pattern are excluded from files and command output.
# Patterns are processed in the order that they are listed.
# Example
```

```

patterns:
- "a_string_1"
- "a_string_2"

# Regular expression pattern redaction per line
# Patterns with regular expressions (regex) are wrapped with "regex:"
# Example

patterns:
  regex:
- "abc.*def"
- "localhost[[:digit:]]"

# Keyword replacement redaction
# Replace keywords in files and command output with generic identifiers
# Keyword does not support regex
# Example

keywords:keywords:
- "1.1.1.1"
- "My Name"
- "a_name"

```

2. **file-content-redaction.yaml** ファイルのパーミッションが **root** 所有者のみに設定されていることを確認します。

```

[root@insights]# ll file-content-redaction.yaml
-rw-----. 1 root root 145 Sep 25 17:39 file-content-redaction.yaml

```

関連情報

[「Insights クライアントアーカイブの検証」](#)

4.6. INSIGHTS クライアントアーカイブの検証

アーカイブファイルの内容を確認できます。アーカイブファイルを検査して、Red Hat Insights に送信されるデータを確認できます。

- 難読化またはリダクションを使用する場合は、送信前にアーカイブを検査できます。
[「アップロード前のアーカイブの検証」](#)
- アーカイブファイルを保持する場合は、システムに保管できます。
[「アップロード後の Insights クライアントアーカイブの検証」](#)

4.6.1. アップロード前のアーカイブの検証

Red Hat Insights に送信される前にアーカイブを検証するには、クライアントを実行し、アップロードせずにファイルを保存します。これにより、クライアントが Insights に送信する情報を表示し、難読化またはリダクション設定を確認することができます。

アーカイブは **/var/tmp/** ディレクトリーに保存されます。**insights-client** ファイルが完了するとファイル名が表示されます。

前提条件

- リダクションを使用する場合は、`/etc/insights-client/remove.conf` ファイルが正しく設定されていることを確認してください。
[「remove.conf ファイルの検証」](#)
- 難読化を使用する場合は、`/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルが正しく設定されていることを確認してください。
[「Red Hat Insights クライアントの難読化の設定」](#)

手順

1. `--no-upload` オプションを指定して `insights-client` コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --no-upload
```

リダクションまたは難読化が適用されると、情報メッセージが表示されます。

```
WARNING: Excluding data from files
Starting to collect Insights data for ITC-4
WARNING: Skipping patterns found in remove.conf
WARNING: Skipping command /bin/dmesg
WARNING: Skipping command /bin/hostname
WARNING: Skipping file /etc/cluster/cluster.conf
WARNING: Skipping file /etc/hosts
Archive saved at /var/tmp/qsINM9/insights-ITC-4-20190925180232.tar.gz
```

2. **Archive saved at** メッセージに示されるように、一時ストレージディレクトリーに移動します。

```
[root@insights]# cd /var/tmp/qsINM9/
```

3. 圧縮ファイル `tar.gz` を展開します。

```
[root@insights]# tar -xzf insights-ITC-4-20190925180232.tar.gz
```

この結果、ファイルを格納する新規ディレクトリーが作成されます。

4.6.2. アップロード後の Insights クライアントアーカイブの検証

クライアントを実行してファイルを保存すると、Red Hat Insights に送信した後の検査用にアーカイブを保存できます。これにより、クライアントが Insights に送信する情報を検証し、難読化またはリダクション設定を確認することができます。

前提条件

- リダクションを使用する場合は、`/etc/insights-client/remove.conf` ファイルが正しく設定されていることを確認してください。
[「remove.conf ファイルの検証」](#)
- 難読化を使用する場合は、`/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルが正しく設定されていることを確認してください。
[「Red Hat Insights クライアントの難読化の設定」](#)

手順

1. **--keep-archive** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --keep-archive
```

このコマンドは、情報メッセージを表示します。

```
Starting to collect Insights data for ITC-4
Uploading Insights data.
Successfully uploaded report from ITC-4 to account 6229994.
Insights archive retained in /var/tmp/ozM8bY/insights-ITC-4-20190925181622.tar.gz
```

2. **Insights archive retained in** メッセージに示されるように、一時ストレージディレクトリーに移動します。

```
[root@insights]# cd /var/tmp/ozM8bY/
```

3. 圧縮ファイル **tar.gz** を展開します。

```
[root@insights]# tar -xzf insights-ITC-4-20190925181622.tar.gz
```

この結果、ファイルを格納する新規ディレクトリーが作成されます。

第5章 RED HAT INSIGHTS のタグ付けの概要

Red Hat Insights が管理するシステムに説明タグを追加して、個別のシステムにコンテキストマーカを追加してから、Insights アプリケーションのタグでフィルタリングし、一意のシステムや関連するシステムを見つけることができます。この機能は、大規模な Insights をデプロイする場合に特に有用です。これには、Insights の管理下で数百または数千ものシステムが含まれます。



注記

タグ付けの初期リリースは、Red Hat Insights インベントリおよびサービスによりサポートされます。

前提条件

Red Hat Insights のタグ付け機能を使用するには、以下の前提条件および条件を満たしている必要があります。

- **tags.yaml** ファイルへの追加または変更には、root パーミッション、またはそれらと同等のパーミッションが必要です。
- Red Hat Insights クライアントが各システムにインストールされている。

5.1. タグおよび TAGS.YAML の作成

このセクションでは、タグの作成と **tags.yaml** ファイルの使用に関する詳細情報を提供します。

5.1.1. タグ構造

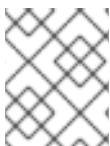
タグは、**namespace/key=value** のペアの構造を使用します。

- **Namespace.**名前空間は、取得ポイントである **insights-client** の名前であり、変更することはできません。この **tags.yaml** ファイルは名前空間から抽象化され、アップロード前にクライアントによってインジェクトされます。
- **Key.**キーは、ユーザーが選択したキーまたはシステムの定義済みのキーにすることができます。大文字、文字、数字、記号、および空白文字の組み合わせを使用できます。
- **Value.**独自の記述文字列値を定義します。大文字、文字、数字、記号、および空白文字の組み合わせを使用できます。

5.1.2. Tags.yaml ファイル

ユーザー定義のタグが **/etc/insights-client/tags.yaml** ファイルに追加されています。必要に応じて、任意の数の **key=value** ペアを **tags.yaml** に追加できます。YAML 構文を使用すると、コンテンツを簡単に理解し、変更できます。

insights-client --group=eastern-sap を実行すると、タグ付け設定ファイル **/etc/insights-client/tags.yaml** が作成され、エントリ **group: eastern-sap** が追加されます。以下の **tags.yaml** ファイルの例は、グループ「eastern-sap」に追加されたタグを示しています。



注記

key=value のペアの作成時には、大文字、文字、数字、記号、および空白文字の組み合わせを使用できます。

例

```
# tags
---
group: eastern-sap
name: Jane Example
contact: jexample@corporate.com
Zone: eastern time zone
Location:
- gray_rack
- basement
Application: SAP
```

5.2. システムにタグを追加

tags.yaml にタグを追加を開始する最も簡単な方法は、**insights-client --group=<name-you-choose>** を使用することです。これは、以下の操作を実行します。

1. **etc/insights-client/tags.yaml** ファイルを作
2. **group** キーと <name-you-choose> の値を **tags.yaml** に追加
3. システムから cloud.redhat.com に新規アーカイブをアップロード。最新の結果とともに新規タグがすぐに表示される

初期 **group** タグの作成後に、必要に応じて **tags.yaml** を編集してその他のタグを追加できます。

以下の手順では、初期グループおよび **tags.yaml** ファイルを作成し、Insights インベントリーのタグを検証する方法を説明します。

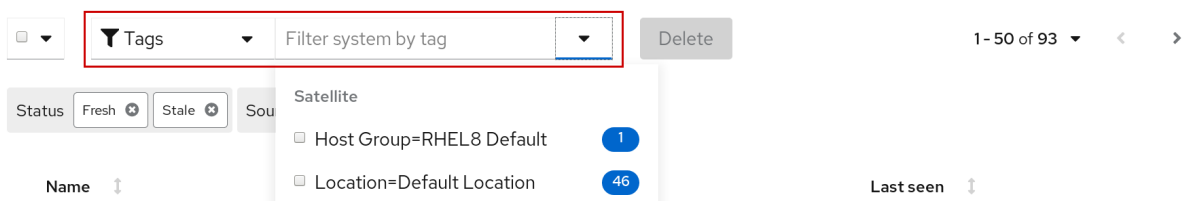
手順

1. 以下のコマンドを実行して、グループ名を追加し **--group=**ます。

```
[root@server ~]# insights-client --group=<name-you-choose>
```

検証手順

1. 必要に応じて [Red Hat Insights > Inventory](#) に移動し、ログインします。
2. **フィルター** ドロップダウンメニューをクリックして、**タグ** を選択します。





3. 検索ボックスで、下矢印をクリックしていずれかのタグを選択するか、タグの名前を入力します。



注記

タグキーまたは値で検索することができます。

- 結果内でシステムを見つけ、タグアイコンが禁止され、システムに適用されるタグの数を示していることを確認します。

Name ↑	Tags	Last seen ↑
<input type="checkbox"/> rhel8desktop	 5	1 hour ago
<input type="checkbox"/> ml.cockpit.lan	 0	4 hours ago

- タグをクリックすると、そのシステムに適用される各タグが表示されます。

5.3. タグを追加または変更するための TAGS.YAML の編集

group タグの作成後に、**tags.yaml** のコンテンツを編集して、必要に応じてタグの追加を変更を行います。システムに、複数のフィルター処理可能なタグを追加します。

手順

- コマンドラインで、編集するタグ設定ファイルを開きます。

```
[root@server ~]# vi /etc/insights-client/tags.yaml
```

- コンテンツを編集するか、必要に応じて key=value ペアを追加します。以下の例は、システムに複数のタグを追加する際の **tags.yaml** の管理方法を示しています。

```
# tags
---
group: eastern-sap
location: Boston
description:
- RHEL8
- SAP
key 4: value
```



注記

必要な数の key=value ペアを追加します。大文字、文字、数字、記号、および空白文字の組み合わせを使用します。

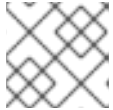
- 変更を保存し、エディターを閉じます。
- Insights へのアップロードを生成します。

```
[root@server ~]# insights-client
```

検証手順

- 必要に応じて [Red Hat Insights > Inventory](#) に移動し、ログインします。
- フィルター ドロップダウンメニューをクリックして、**タグ** を選択します。

3. 検索ボックスで、下矢印をクリックしていずれかのタグを選択するか、タグの名前を入力して選択します。

**注記**

タグキーまたは値で検索することができます。

4. 結果でシステムを検索します。
5. タグアイコンが禁止され、システムに適用されるタグの数を示す数字が表示されることを確認します。
6. タグをクリックすると、そのシステムに適用される各タグが表示されます。

第6章 INSIGHTS-CLIENT スケジュールの変更

Insights クライアントの実行時に制御するスケジュールを無効化、有効化、および変更できます。デフォルトでは、Insights クライアントは 24 時間ごとに実行されます。デフォルトのスケジュールのタイムは異なるため、すべてのシステムで同時にクライアントが実行されません。



注記

insights-client スケジュールの変更には、`/etc/redhat-release` に示される RHEL のバージョンによって異なります。

- [「クライアントスケジュールの無効化」](#)
- [「Insights クライアントスケジュールの有効化」](#)
- [「クライアントスケジュールの変更」](#)

6.1. クライアントスケジュールの無効化

デフォルトの Insights クライアント設定を変更し、新しいスケジュールを作成する前に、クライアントスケジュールを無効にする必要があります。

Insights クライアントのどのバージョンと RHEL バージョンがインストールされているかに応じて、以下の表に示される手順を選択します。

表6.1 クライアントバージョンおよび RHEL リリースに基づくクライアントスケジュールの無効化

RHEL のバージョン	クライアントバージョン	アクション
RHEL 6 から RHEL 7.4	Client 1.x  注記 Client 1.x はサポート対象外になりました。	設定ファイル <code>/etc/insights-client/insights-client.conf</code> の変更および CLI の使用
RHEL 7.5 以降	Client 1.x  注記 Client 1.x はサポート対象外になりました。	CLI の使用
RHEL 6、RHEL 7、およびそれ以降	Client 3.x	CLI の使用

クライアント 1.x で RHEL 7.4 以前を無効にする手順

備考

Client 1.x はサポート対象外になりました。

1. **insights-client** コマンドに **--version** オプションを指定してクライアントバージョンを確認します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 1.0.2-0
Core: 1.0.76-1
```

2. **--no-schedule** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントスケジュールを無効にします。このコマンドは、**/etc/cron.daily** にあるシンボリックリンクを削除します。

```
[root@insights]# insights-client --no-schedule
```



注記

--no-schedule オプションは Client 3.x 以上で非推奨となりました。

3. エディターで **/etc/insights-client/insights-client.conf** ファイルを開き、以下の行を追加します。

```
no_schedule=True
```

Client 1.x で RHEL 7.5 以降を無効にする手順

備考

Client 1.x はサポート対象外になりました。

1. **insights-client** コマンドに **--version** オプションを指定してクライアントバージョンを確認します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 1.0.2-0
Core: 1.0.76-1
```

2. **--no-schedule** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントスケジュールを無効にします。

```
[root@insights]# insights-client --no-schedule
```



注記

--no-schedule オプションは Client 3.x 以上で非推奨となりました。

RHEL 6、RHEL 7 以降で Client 3.x で無効にする手順

1. **insights-client** コマンドに **--version** オプションを指定してクライアントバージョンを確認します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 3.0.6-0
Core: 3.0.121-1
```

2. **--disable-schedule** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントスケジュールを無効にします。

```
[root@insights]# insights-client --disable-schedule
```

6.2. INSIGHTS クライアントスケジュールの有効化

クライアントスケジュールを有効にして、デフォルト設定で実行できます。スケジュールを変更した場合は、この設定が優先されます。

前提条件

- クライアントスケジュールは無効になっています。
「[クライアントスケジュールの無効化](#)」
- (オプション) デフォルトのスケジュールを変更している。
「[クライアントスケジュールの変更](#)」

RHEL 7.4 以前および Client 1.x で有効にする手順

備考

Client 1.x はサポート対象外になりました。

1. **insights-client** コマンドに **--version** オプションを指定してクライアントバージョンを確認します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 1.0.2-0
Core: 1.0.76-1
```

2. エディターで **/etc/insights-client/insights-client.conf** ファイルを開き、次の行の変更を **False** に追加します。

```
no_schedule=False
```

3. **--register** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントスケジュールを有効にします。

```
[root@insights]# insights-client --register
```

RHEL 7.5 以降および Client 1.x で有効にする手順

備考

Client 1.x はサポート対象外になりました。

1. **insights-client** コマンドに **--version** オプションを指定してクライアントバージョンを確認します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 1.0.2-0
Core: 1.0.76-1
```

2. **--register** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントスケジュールを有効にします。

```
[root@insights]# insights-client --register
```

RHEL 7以降および Client 3.x で有効にする手順

1. **insights-client** コマンドに **--version** オプションを指定してクライアントバージョンを確認します。

```
[root@insights]# insights-client --version
Client: 3.0.6-0
Core: 3.0.121-1
```

2. **--enable-schedule** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、クライアントスケジュールを有効にします。

```
[root@insights]# insights-client --enable-schedule
```

6.3. クライアントスケジュールの変更

スケジュールを変更することで、Insights クライアントが実行時に変更できます。使用方法は、RHEL リリースと、システムが実行しているクライアントバージョンによって異なります。RHEL のバージョンに一致する手順を選択します。

- RHEL 7.4 以前
「[insights-client](#) を使用した **cron** のスケジューリング」
- RHEL 7.5 以降
「[systemd](#) 設定による **insights-client** スケジューリング」

前提条件

- 「[クライアントスケジュールの無効化](#)」

6.3.1. insights-client を使用した cron のスケジューリング

システム **cron** ファイルを更新すると、**insights-client** の実行のデフォルトスケジュールを変更できます。



注記

cron で **insights-client** を修正する手順は、Client バージョン 1.x を実行している RHEL 7.4 リリース以前のバージョンに適用されます。

前提条件

- [「クライアントスケジュールの無効化」](#) .
- man ページで **crontab(1)** と **cron(8)** を確認し、**cron** の依存関係を調べます。

手順

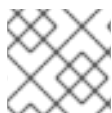
1. Insights クライアントスケジュールを無効にしたら、任意のスケジュールで **insights-client** を実行するように **cron** を設定します。
2. 変更が完了したら、RHEL 7.4 以前の **insights-client** スケジュールを有効にします。

関連情報

- [「Insights クライアントスケジュールの有効化」](#)
- [cron 使用方法と使用方法](#)

6.3.2. systemd 設定による insights-client スケジューリング

システム **systemd** 設定と **insights-client-timer** ファイルを更新して、**insights-client** の実行のデフォルトスケジュールを変更できます。



注記

systemd 手順は、RHEL 7.5 以降に適用されます。

前提条件

- [「クライアントスケジュールの無効化」](#)
- man ページの **systemctl(1)**、**systemd.timer(5)**、**systemd.time(7)** を確認し、次の手順に進む前に **systemd** を調べます。

手順

1. **systemctl** コマンドを入力して、**insights-client.timer** systemd ユニットの設定を上書きします。

```
[root@insights]# systemctl edit insights-client.timer
```

このアクションは、デフォルトのシステムエディターで空のファイルを開きます。

2. 以下の設定は、**systemd** ユニットのデフォルト値です。スケジュールを変更する別の設定を入力します。

```
[Timer]
OnCalendar=daily
RandomizedDelaySec=14400
```

3. **--enable-schedule** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力し、**insights-client** スケジュールを有効にします。

```
[root@insights]# insights-client --enable-schedule
```


第7章 RED HAT INSIGHTS の自動ルール更新の変更

以下の手順では、Insights クライアントで自動ルール更新設定を変更する方法を説明します。

- [「Red Hat Insights の自動ルール更新の無効化」](#)
- [「Red Hat Insights の自動ルール更新の有効化」](#)

7.1. RED HAT INSIGHTS の自動ルール更新の無効化

Red Hat Insights の自動コレクションルールの更新を無効にできます。これを実行する場合、古いルール定義ファイルを使用し、最新の検証更新を取得しないリスクがあります。

手順

1. エディターで `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを開きます。
2. 対象の行を見つけます。

```
#auto_update=True
```

3. `#` を削除し、`True` を `False` に変更します。

```
auto_update=False
```

4. `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを保存してから閉じます。

関連情報

- [「Red Hat Insights の自動ルール更新の有効化」](#)

7.2. RED HAT INSIGHTS の自動ルール更新の有効化

更新を無効にした場合は、Red Hat Insights の自動コレクションルールの更新を有効にできます。デフォルトでは、ルール自動更新は有効になっています。

前提条件

自動ルールコレクションは無効にする必要があります。

[「Red Hat Insights の自動ルール更新の無効化」](#)

手順

1. エディターで `/etc/insights-client/insights-client.conf` ファイルを開きます。
2. 対象の行を見つけます。

```
auto_update=False
```

3. `False` を `True` に変更します。

```
auto_update=True
```

4. **/etc/insights-client/insights-client.conf** ファイルを保存してから閉じます。

第8章 認証方法の設定

Red Hat Insights の使用方法に応じて、以下のいずれかの認証方法を使用する必要があります。

- 証明書ベースの認証 (CERT)
デフォルトの認証方法は、証明書を使用します。証明書は、Red Hat Subscription Manager (RHSM) にシステムを登録するか、システムが Red Hat Satellite システム管理で管理される際に生成されます。その他の設定変更は必要ありません。
- SSO 認証情報ベースの認証 (BASIC)
代替の認証方法は SSO 認証情報を使用します。有効な Red Hat カスタマーポータルユーザー名がある場合は、有効な Red Hat SSO 認証情報が作成されます。Red Hat Insights で SSO 認証情報を使用するには、システムが基本認証を使用するように設定する必要があります。

関連情報

- [Red Hat Insights の基本認証の設定](#)

第9章 サポート用の診断ログの作成

サポートチームと共有する診断ログを作成できます。

手順

1. **--support** オプションを指定して **insights-client** コマンドを入力します。

```
[root@insights]# insights-client --support
```

このコマンドは、サポートファイルの作成中に情報メッセージを表示します。

```
Collecting logs...
Insights version: insights-core-3.0.121-1
Registration check:
status: True
unreachable: False
....
Copying Insights logs to archive...
Support information collected in /var/tmp/H_Y43a/insights-client-logs-20190927144011.tar.gz
```

2. **Support information collected in** メッセージに示されるように、コレクションディレクトリーに移動します。

```
[root@insights]# cd /var/tmp/H_Y43a
```

3. 圧縮ファイル **tar.gz** を展開します。

```
[root@insights]# tar -xzf insights-client-logs-20190927144011.tar.gz
```

この結果、ファイルを格納する新規ディレクトリーが作成されます。要求された場合は、サポートチームと **tar.gz** ファイルを共有できます。

第10章 INSIGHTS-CLIENT のコマンドオプション

insights-client コマンドとそのオプションを使用して、システムで Insights クライアント操作を制御できます。**insights-client.rpm** は Insights の個々のコンポーネントよりも頻繁に更新されるため、man ページには **insights-client** コマンド操作に関する最新情報が含まれていない可能性があります。

root 権限を持つシステム管理者は、クライアントがデータを収集し、**insights-client** コマンドを入力する度にデータを収集し、Red Hat Insights に送信します。



注記

insights-client --display-name コマンドを使用して表示名を設定すると、即座に適用されますが Insights クライアントは実行されません。

表10.1 **insights-client** ユーザーコマンドのオプション

オプション	説明
--help -h	ヘルプ情報の表示
--register	/etc/hostname に記載の情報を使用して、ホストを Insights に登録します。 --disable-schedule が設定されていない限り、自動的に夜間 cron ジョブを有効にします。
--unregister	Insights からホストの登録を解除します。
--display-name=DISPLAY_NAME	GUI でホスト表示名を設定または変更します。 /etc/hostname のものとは異なる名前が必要な場合は、 --register を指定することで、ホストが登録される際に display_name を設定します。
--group=GROUP	登録中に GROUP にホストを追加します。グループ名が /etc/insights-client/tags.yaml で定義されます。
--retry=RETRIES	アップロードを再試行する回数を設定します。デフォルトでは1回です。再試行の間隔は180秒で、これは Insights クライアントがアップロードを再試行するまで待機する時間です。 注記: スケジューラーでは、再試行の回数は3です。
--validate	/etc/insights-client/remove.conf ファイルの構造を検証します。
--quiet	コンソールにエラーメッセージのみをログに記録します。

オプション	説明
--silent	コンソールに何も記録しません。
--enable-schedule	<p>ジョブスケジュールを有効にします。デフォルトでは、Insights クライアントは毎日、または途中で実行されます。</p> <p>注記: Client 1.x --register を使用している場合は、オプションを使用してスケジュールを有効にします。</p>
--disable-schedule	ジョブスケジュールを無効にします。
--conf=CONF -c=CONF	デフォルトの <code>/etc/insights-client/insights-client.conf</code> ファイルの代わりにカスタム設定ファイル <code>CONF</code> を使用します。
--compressor	アーカイブの作成時に使用する圧縮を選択します。利用可能なオプションは gz , bz2 , xz , none です。デフォルトは gz です。 none オプションを指定すると、圧縮なしで tar ファイルを作成します。
--no-upload	クライアントを実行しますが、Red Hat Insights または CMSfR Web アプリケーションにアーカイブをアップロードしません。アーカイブは <code>/var/tmp/</code> ディレクトリーに保存されます。 insights-client ファイルが完了するとファイル名が表示されます。
--offline	ネットワーク機能を使用せずにクライアントを実行します。 --no-upload を意味します。
--logging-file=LOGFILE	ログデータを指定の LOGFILE に出力します。デフォルトのログファイルは <code>/var/log/insights-client/insights-client.log</code> です。
--diagnosis	API から診断情報を取得します。 --diagnosis を使用する前に、少なくとも1回システムを登録してアップロードする必要があります。
--compliance	システムを OpenSCAP でスキャンし、レポートをアップロードします。
--payload=PAYLOAD	特定のアーカイブの PAYLOAD ファイルを Red Hat Insights にアップロードします。 --content-type が必要です。
--content-type=TYPE	PAYLOAD ファイルの content-type を設定します。このタイプは <code>gz</code> , <code>bz2</code> , <code>xz</code> , および <code>none</code> です。TYPE は、 --compressor PAYLOAD で使用されるものと同じである必要があります。

オプション	説明
--check-results	Red Hat Insights から分析結果を取得します。
--show-results	--check-results で取得した分析結果を表示します。
--output-dir=DIR	アップロードするのではなく、指定したディレクトリーにコレクションを書き込みます。
--output-file=FILE	アップロードするのではなく、指定したアーカイブにコレクションを書き込みます。

insights-client コマンドには、操作のデバッグに役立つ複数のオプションがあります。

表10.2 **insights-client** デバッグオプション

オプション	説明
--version	insights-client クライアントおよびコアのバージョンを出力します。
--test-connection	Red Hat Insights サービスへの接続をテストします。
--force-reregister	Insights でシステムを再登録し、新しい ID を使用します。このアクションは、すでに登録済みのシステムを複製するものです。
--verbose	コンソールへのデバッグ出力をすべてログに記録します。
--no-upload	クライアントを実行しますが、アーカイブをアップロードしません。アーカイブは /var/tmp/ ディレクトリーに保存されます。 insights-client ファイルが完了するとファイル名が表示されます。
--keep-archive	アップロード後にアーカイブを保持します。
--support	サポート用の診断ログを生成します。
--status	ホスト登録の状態を表示します。
--net-debug	コンソールへのネットワーク呼び出しをログに記録します。

第11章 INSIGHTS クライアントの REMOVE.CONF 設定ファイルのオプション



注記

RHEL 6.10、7.9、8.3 以降では、**remove.conf** の使用が非推奨となり、2つのYAMLファイルに置き換えられました。[12章 Insights クライアントのYAML リダクション設定ファイルのオプション](#)を参照してください。

設定ファイル **/etc/insights-client/remove.conf** データの重複方法を制御します。Insights クライアントは、**remove.conf** にある情報に基づいてアーカイブファイルに対してリダクションを実行します。ほとんどのリダクションアクティビティは、アーカイブファイルが生成され、Red Hat Insights サービスに送信される前に発生します。

ファイル名および場所

推奨される名前は、リダクション設定ファイルの **/etc/insights-client/remove.conf** です。このファイルを作成するには、root パーミッションが必要です。Insights クライアントデプロイメントの一部として自動的に作成されません。



注記

/etc/insights-client/insights.client.conf 設定ファイルは、リダクション設定ファイルの名前と場所を指定します。[13章 Insights クライアント設定ファイルのオプション](#)を参照してください。

remove.conf のファイルテンプレート

以下は、**remove.conf** のファイルのテンプレート例です。

```
[remove]
files=/etc/cluster/cluster.conf,/etc/hosts
commands=/bin/dmesg,/bin/hostname
patterns=password,username
keywords=super$secret,ultra$secret+
```

- それぞれの入力値をスペースを入れない単一コマンド。
- 編集しないデータの行を含めないでください。
- 正規表現およびワイルドカード一致 (**egrep**) はサポートされません。
- すべてのエントリでは大文字と小文字が区別されます。

表11.1 remove.conf 設定オプション

オプション	説明
[remove]	remove.conf ファイルの最初の行である必要があります。

オプション	説明
files=	一覧表示されているファイルは、データの収集から除外されます。
commands=	ここで一覧表示されているコマンドの出力は、データの収集から除外されます。コマンド名は コレクションルール のコマンド名と正確に一致している必要があります。
patterns=	パターン のすべてまたは一部に一致するアーカイブファイルの行が削除されます。
keywords=	<p>キーワードは keyword の実際の値と数字で置き換えられます。</p> <p>たとえば、keywords=host, domain のようにキーワードを2つ定義すると、host の各インスタンスは文字列 keyword0 に置き換えられ、domain の各インスタンスは keyword1 に置き換えられます。定義する追加の各キーワードは増分 keywordn で置き換えられます。</p>

第12章 INSIGHTS クライアントの YAML リダクション設定ファイルのオプション



注記

RHEL 6.10、7.9、8.3 以降では、Insights クライアントは YAML ファイルを使用してリダクションを設定します。以前のリリースでは、**remove.conf** ファイルがリダクションを制御します。**remove.conf** 参考情報については、[11章 Insights クライアントの remove.conf 設定ファイルのオプション](#) を参照してください。

表12.1 file-redaction.yaml のファイルリダクション例

コンテンツ	説明
<pre># file-redaction.yaml ---</pre>	<p>ファイル名を含むオプションのコメント。</p>
<pre># Exclude the entire output of commands # Specify the full command path or the symbolic name in .cache.json commands: - /bin/rpm -qa - /bin/lis - ethtool_i</pre>	<p>/bin/rpm -qa と bin/lis の出力全体が、アーカイブファイルから除外されます。</p> <p>.cache.json ファイルでは、フルコマンド /sbin/ethtool -i がシンボリック名 ethtool_i にマッピングされます。</p>
<pre># Exclude the entire output of files # Specify the full filename path or the symbolic name in .cache.json files: - /etc/audit/auditd.conf - cluster_conf</pre>	<p>指定されたファイルでは、ファイル名とファイルのコンテンツがアーカイブファイルから除外されます。</p> <p>.cache.json ファイルでは、完全ファイルパス /etc/cluster/cluster.conf がシンボリック名 cluster_conf にマッピングされます。</p>

表12.2 file-content-redaction.yaml のコンテンツリダクションの例

コンテンツ	説明
<pre># file-content-redaction.yaml ---</pre>	<p>ファイル名を含むオプションのコメント。</p>

コンテンツ	説明
<pre># Pattern redaction per matching line # Lines that match a pattern are excluded from files and command output. # Patterns are processed in the order that they are listed. # Example patterns: - "a_string_1" - "a_string_2"</pre>	<p>a_string_1 または a_string_2 を含む行に完全に一致するパターンは、パターンがファイルおよびコマンド出力から除外されます。パターン文字列を引用符で囲みます。</p>
<pre># # Regular expression pattern redaction per line # Patterns with regular expressions (regex) are wrapped with "regex:" # Example patterns: regex: - "abc.*def" - "localhost[[:digit:]]" #</pre>	<p>正規表現は regex でラップされます。egrep コマンドで認識される正規表現 (regex) を使用できます。regex を引用符で囲みます。</p>
<pre># Lines matching these regular expressions are excluded # from output. patterns: regex: - "*\.conf" - "^include"</pre>	<p>egrep 正規表現は引用符で囲まれ、正規表現が正しく認識されるようにします。</p> <p>この例では、文字列に .conf が含まれる場合、または行が include で始まる場合は、アーカイブファイルから行が変更されます。</p>
<pre># Replace keywords in files and command output with generic identifiers by the Python socleaner module keywords: - "1.1.1.1" - "My Name" - "a_name"</pre>	<p>keywords: アレイの文字列は、実際の値 keyword と数字に置き換えられます。</p> <p>たとえば、文字列の各インスタンス 1.1.1.1 は keyword0 に置き換えられます。文字列のすべてのインスタンス My Name が keyword1 に置き換えられます。a_name は keyword3 に置き換えられます。定義する各追加のキーワードは、増分の keywordn に置き換えられます。置き換えられた keywordn の値は、Python SoS プロセスで決まり、変更できません。</p> <p>keywords: アレイで定義する文字列は、大文字と小文字を区別します。</p>

第13章 INSIGHTS クライアント設定ファイルのオプション

`/etc/insights-client/insights-client.conf` 設定ファイルの設定を使用することで、Red Hat Insights クライアントがシステムで動作する方法を変更できます。

設定ファイルと CLI に同様のオプションがある場合は、**insights-client** コマンドを入力すると CLI オプションが実行されます。スケジューラーがクライアントを実行すると、設定ファイルのオプションが実行されます。



注記

選択はすべて以下のように入力します。**True** と **False** は、最初の大文字を使用する必要があります。

設定ファイルでオプションを有効にするには、行の最初の文字として **#** を削除して値を指定します。この変更は、次回の実行スケジュール時か、**insights-client** コマンドの入力時に反映されます。

表13.1 `insights-client.conf` 設定オプション

オプション	説明
<code>[insights-client]</code>	クライアント設定ファイルに別の場所や名前を指定した場合は、設定ファイルの最初の行が必要です。
<code>#loglevel=DEBUG</code>	ログレベルを変更します。オプション: DEBUG、INFO、WARNING、ERROR、CRITICAL デフォルトは DEBUG です。デフォルトのログファイルの場所は <code>/var/log/insights-client/insights-client.log</code> です。
<code>#auto_config=True</code>	Satellite Server で自動設定を試行します。値は True (デフォルト) または False にできます。  注記 auto_config=True (デフォルト) の場合、使用される認証方法は CERT です。
<code>#authmethod=BASIC</code>	認証方法を設定します。BASIC、CERT の有効なオプション。 auto_config=True の場合に CERT が使用されている場合でも、デフォルト値は BASIC です。
<code>#username=</code>	<code>authmethod</code> が BASIC の場合に使用する username 。 username はクリアテキストで保存されます。
<code>#password=</code>	<code>authmethod</code> が BASIC の場合に使用する password 。 password はクリアテキストで保存されます。

オプション	説明
#base_url=cert-api.access.redhat.com:443/r/insights	API のベース URL。
#proxy=	プロキシの URL。例: http://user:pass@192.168.100.50:8080
#auto_update=True	動的設定を自動的に更新します。自動的に更新しない場合、デフォルトは True Change to False になります。
#obfuscate=False	IPv4 アドレスを難読化します。デフォルトでは False です。アドレスの難読化を有効にするには True に変更します。
#obfuscate_hostname=False	ホスト名の難読化。ホスト名を難読化するには obfuscate=True を設定する必要があります。これにより、IPv4 アドレスの難読化が有効になります。ホスト名のみを難読することはできません。
#display_name=	登録用の表示名。デフォルトでは、 <code>/etc/hostname</code> を使用します。注記: この値は insights-client --display-name と作用します。CLI を使用して表示名を変更し、設定ファイル内で別の表示名が有効になっている場合は、スケジューラーが Insights クライアントを実行すると、表示名は設定ファイルの値に戻ります。
#cmd_timeout=120	コレクション時に実行されるコマンドのタイムアウト (秒単位)。タイムアウト値に達すると、コマンドプロセスが終了します。
#http_timeout=120	HTTP 呼び出しのタイムアウト (秒単位)。
#remove_file=/etc/insights-client/remove.conf	リダクションファイルの場所